明石の史跡（５９）島津忠兼

兵庫湊川合戦（建武３＝１３３６年５月２５日）から２か月あまり、明石郡の北辺において、南軍の不穏な動きが見られる。

８月３日、岸田少輔房隆覚は、東条城（加東郡）。７日には淡河荘（美嚢郡）において、南軍と合戦に及んでいる（辻文書／大日本史料６－３．６５１頁）。

９月５日、下揖保荘地頭島津周防五郎三郎忠兼と左衛門三郎忠政は、明石郡下端（神戸市垂水区下畑）に城郭を構えた南軍と合戦。その後の数日は、撃退した南軍を追って、押部（神戸市西区）・志深見（三木市志染町）に転戦する。

９月２０日には、丹生寺（神戸市北区丹生山上の明要寺）での激戦の結果、忠兼自身も負傷する（文化庁所蔵島津文書／南北朝遺文九州編７７７・７７８号）。
丹生寺に立て籠もった南軍は、金谷経氏（新田義貞一族）であった（太平記巻１９）。丹生山の山麓を走る湯山街道（姫路市より三木・有馬・生瀬・小浜を経由して箕面市の瀬川にて、西国街道＝１７１号線に合流）を遮断した南軍は、ゲリラ戦を展開。播磨守護赤松円心の頭痛の種の一つであった。

それから２年後の建武５年（１３３８）閏７月、丹生山の南軍の鉾先は、明石地方に向けられた。２６日、明石城を攻めた南軍は、翌２７日には加爾坂（和坂）北方に展開する。これを撃退したのは円心指揮下の島津忠兼であった（文化庁所蔵島津文書／南北朝遺文九州編１２２０号）。

注目したいのは、明石城の呼称が見られることである。現明石城の本丸付近には、中世には人丸神社が鎮座しており、景勝の地であるとともに下に山陽道をひかえ、明石海峡には、９世紀より対岸の岩屋とのフェリーが運航され、物流の面からも戦略的には重要な場所であった。これ以後のある時期まで、島津忠兼は明石を警固しており、当地方の治安責任者であったとも位置づけられる。

日本歴史学会会員 茨木 一成